

児童の遊び経験と共感性に関する研究

A96-4422 芹澤聡子 (指導教官 朝倉隆司)

1. 目的

本研究の目的は、児童における遊び経験と共感性との関係を検討し、児童の共感性の発達を育成する遊び方を明らかにすることである。

2. 研究方法

東京都及び静岡県の公立小学校4・5年生479名(男子252名、女子227名)を対象に質問紙調査を行った。調査内容は①基本的属性②遊び環境③遊び経験④児童の共感性である。分析はSPSSを用い、性差並びに遊び経験と共感性との関係を χ^2 検定、tテスト、分散分析を用いて検討した。

3. 主な結果と考察

共感性得点の平均点の性差をみると、男子は45.3点、女子は49.9点で、1%水準の有意差が認められたので、以下の分析は男女別に行った。

1) 男子における遊び経験と共感性 (表1)

①ルールのある遊び ルールのある遊びを「よくする」者は共感性得点が高く(46.6±6.6)、「しない」者は低かった(41.0±6.7)。また、「ルールを絶対に守らなければならないと思ったことがある」者は得点が高かった(47.3±5.9)。これらのことは、「ルール」の意味を遊びの中で感じる経験が共感性を高めることを示唆している。

②勝敗のある遊び 男子においては、勝敗のある遊び経験の有無と共感得点に関係はみられなかった。しかし、勝敗が決まった時、例えば、「負けた時に、勝った友達をほめたことがある」者は得点が高かった(47.6±6.5)。したがって勝敗のある遊びにおいては、結果に固執するのではなく、戦った仲間や敵の気持ちを察した働きかけをする経験が共感性を高めると考えられる。

③集団遊びでの仲間関係 「仲間同士でアドバイスをしたことがある」者は得点が高かった(47.1±5.8)。また、遊びの中で起こるいじめ行動として、例えば、「遊んでいる時に嫌いな子ひとりだけをねらったことがある」者は得点が低かった(41.9±6.3)。遊び行動が自己中心的な者は共感性が低く、仲間と共に楽しもうとする経験は共感性が高い。

2) 女子における遊び経験と共感性 (表2)

①ルールのある遊び ルールのある遊びを「しない」者は得点が低かった(45.3±7.5)。しかし、

ルールのある遊びをしている者でも、例えば、「自分がルールを破った時、気にしなかった」者は得点が低かった(45.9±6.9)。望ましくない行動が起きた時に、そのままにしてしまうことは共感性の発達にマイナスに働く可能性がある。

②勝敗のある遊び 勝敗のある遊びを「よくする」者は得点が高く(51.3±4.8)、「しない」者は得点が低かった(47.3±6.2)。また、勝敗が決まった時に、例えば、「勝った時に負けた相手をほめたことがある」者は得点が高かった(52.3±4.4)。女子においても、負けた相手や仲間の立場を考えた働きかけをする経験により共感性が育成されると考えられる。

③集団遊びでの仲間関係 遊びの中でもめごとが起きた時、「自分が悪かったかどうかを考えた」者は得点が高く(51.8±4.3)、「解決できずに遊びをやめた」者は得点が低かった(48.3±6.2)。すなわち、もめごとの有無が共感性の発達に関係するのではなく、もめごとを自分の問題として捉え、解決しようと努力するか否かが共感性の育成を左右すると思われる。

表1. 男子における主な遊び経験と共感性の関係

	はい(人数)	いいえ(人数)
ルールは絶対に守らなければならないと思った	47.3(110)	43.2(80)
負けたときに、勝った友達をほめた	47.6(109)	43.1(91)
嫌いな子ひとりだけねらった	41.9(57)	46.5(169)
仲間同士でアドバイスをした	47.1(136)	42.5(85)

注) 共感得点の平均点 すべて $P < .01$ の有意性を表す。

表2. 女子における主な遊び経験と共感性の関係

	はい(人数)	いいえ(人数)
自分がルールを破った時、気にしなかった	45.9(10)	50.6(40)
勝ったときに、負けた相手をほめた	52.3(80)	48.6(90)
もめごとが起きた時、自分が悪かったかを考えた	51.8(65)	48.4(86)
もめごとが起きた時、解決できずに遊びをやめた	48.3(47)	50.6(103)

注) 共感得点の平均点 すべて $P < .01$ の有意性を表す。

4. 結論

児童にとって遊びは、仲間関係の基礎を固める場のひとつであると同様に、遊びの中でのネガティブな経験は共感性の発達を阻害する可能性があることも分かった。それゆえ、教師は児童の遊びを単なる気晴らしや、身体的・運動的発達の場としてのみ捉えるのではなく、社会関係のスキルを学ぶ場として考える必要がある。

5. 主な参考文献

1) 山村賢明(1986)仲間集団と子どもの発達. 教育と医学. 34(7): 614-621